

令和7年 秋季俳句講座

「私と季語（6）」

第4回 今井 聖

「生きている季語と死んだ季語」

あらかじめ「本意」を設定することが季語を駄目にする。

「本意」とは、その時その瞬間の「我」と「対象」との一回性の出会いの中にある。

主催 公益社団法人俳人協会

今井 聖 プロフィール

俳人・小説家・脚本家（1950年生）

（以下脚本関係・ペンネーム今井邦博）

1991年 日本テレビ水曜グランドロマン「落第判定会議」

監督 三村晴彦、脚本 馬場当（まさる）、

原作 今井邦博。

1995年 映画「エイジアン・ブルー」―浮島丸サコン―監督 堀川弘通

共同脚本 山内久・今井邦博，95年度シナリオ年鑑代表
シナリオ。

（以下小説関係）

2009年 小説『ライク・ア・ローリングストーン』―俳句少年漂流記―
（岩波書店）。

2012年 岩波ジュニア新書『部活で俳句』（岩波書店）。

（以下俳句関係）

1971年 加藤楸邨に師事・「寒雷」に投句を始める。

1981年 「寒雷集賞」受賞。

1985年 「寒雷」同人（2000年頃に退会）

1995年 「寒雷」清山賞（同人賞）受賞。

1996年 俳句誌「街」を創刊。

2017年 第32回俳人協会評論賞受賞

『言葉となればもう古し』（加藤楸邨論）』。

句集四冊最新刊は『九月の明るい坂』（朔出版）。

俳人協会理事、シナリオ作家協会会員。

令和7年秋季俳句講座「私と季語(6)」

第四回「生きている季語と死んだ季語」

今井 聖

○誤解されるかもしれないので言っておきます。これから申し上げるのは、「歳時記に季語として出ているけれど今ではほとんど使われなくなったものを死んだ季語といい、歳時記の季語の中で今でもよく使われているものを生きている季語と言う」という論題ではありません。

○歳時記の中に定められて載っている季語の本意は、「いわゆる」つきの一般的概念。これを通念と言います。歳時記に解説されている通念をその通りに使うとそれは死んだ季語ということになります。

○我らの「生」は個々全員が異なります。同じ人生が一つもないように同じ感受性も一つありません。それにも関わらず規格化され一般化された通念を「俳句性」として肯定して同じであることに意義を見出そうとするならそれは「宗教」とか「ゲーム」の類と同じです。文学でも文芸でもありません。

○「この一句の中でこの季語は動かない」というのが誉め言葉として通っていますが、それも間違いです。それは俳句の中で季語が主役であるという考え方に基づいています。

○毎日、毎日、「自分」は刻々と姿を変える。「思い」は千変万化、笑い、泣き、憤り、歓喜し、鬱屈します。そういう「自分」が見る対象もまた姿を変えるのです。

目の前の朝顔は昨日と同じでありません。「自分」が悲しいときの朝顔と嬉しいときの朝顔は様相を変えます。また、朝顔自身も刻々と変化します。変化する「自分」と変化する「朝顔」が或る一瞬に出会う。一回性の出会い。それが俳句です。

○作者と対象の二者の遭遇に於て、主体は「自分」なのですから飽くまで「自分」が主役。季語はかけがえのない脇役でありそれ以上でもそれ以下でもないのです。

生きている季語の例

徴発の馬つゞきけり年の市

正岡子規

ばばばかりと書かれし壁の干菜かな

高濱虚子

漂へる手袋のある運河かな

高野素十

また微熱つくつく法師もう黙れ

川端茅舎

夏の河赤き鉄鎖のはし浸る

山口誓子

肘つきて身起すまでに雪霏々と

山口誓子

城を出し落花一片いまもとぶ

山口誓子

最上川につつこみ青菜振り洗ふ

加藤楸邨

口といふものあるとき鯉をはなれけり

加藤楸邨

おぼろ夜のかたまりとしてものおもふ

加藤楸邨

あかんぼの舌の強さや飛び飛ぶ雪

中村草田男

病む六人一寒燈を消すとき来

石田波郷

汝を泣かせて心とけたる秋夜かな

杉田久女

足袋の型おろかし逢ひにゆくときも

寺田京子

冬の日と余生の息ときしちがふ

斎藤玄

闇濃くて腐臭に近し沈丁花

野澤節子

凍蝶も記憶の蝶も翅を欠き

橋本多佳子

風降ろしきるまで父にゐて貰ふ

鷹羽狩行

屋上に洗濯の妻空母海に

金子兜太

生前も死後もつめたき箒の柄

飯田龍太

井戸の辺をすり抜け屏風運ばるる

波多野爽波

令和8年 春季俳句講座

「第1句集を読む ― 師系を超えて(9)」

◆ 4月14日(火)

第1回講師 ― 今瀬 剛一

◆ 4月21日(火)

第2回講師 ― 岩田 由美

◆ 4月28日(火)

第3回講師 ― 小川 軽舟

◆ 5月12日(火)

第4回講師 ― 鳥居真里子

★対面式講座に戻ります。

(会場・・俳句文学館)